ハノイ日本人学校における生活科「まちたんけん」の指導実践

前ハノイ日本人学校　教諭
京都府京丹後市立大宮第一小学校　教諭　谷　川　直　樹

キーワード：在外教育施設、ベトナム、ハノイ、生活科、国際理解、国際交流

１．ハノイ日本人学校の児童生徒とベトナムの人々

ベトナムは現在、高度経済成長の真っただ中である。日本企業の進出も盛んで、ハノイ日本人学校の児童生徒数は右肩上がりに増えている。2019年度の児童生徒数は481人（7月現在）である。私が赴任した2016年は約340人だったことを考えると急速に増加している。

海外暮らしとはいえど、バス通学の子どもたちにとっては、学校とアパートとの往復が日々の生活であり、日常生活の中でベトナムの人々と関わる機会は、住んでいる割に多くはない。ベトナムの人達はフレンドリーで親切な人々である。その反面、日本人と比べると時間や決まりを守ることに対してルーズな一面もある。日本人の中には、ベトナムやベトナムの人々に対し、「町が汚い、ルールを守らない」などのよくないイメージを持っている人々もいる。ハノイ日本人学校の保護者においてもそれは例外ではない。

考えの影響を受けてか、私の担任した２年生の子どもたちにアンケートを取ると「日本はきれいだけど、ベトナムはまちがきたない」「ベトナム人はてきとう」などというベトナムに対する否定的な見方が多く見られた。縁あって住んでいる、住ませてもらっているベトナム・ハノイの街や人々に対してこのような印象を持っているというのは実に寂しいことである。そして、その多くがベトナムの人と直接かかわることなく、見たり聞いたりしたことによって子どもたちの中に形成されている印象であるからなおさらである。

生活科の「まちたんけん」の学習を使って、子どもたちにベトナムの街や人々の良さに気づいてほしいと考え、学習を計画した。

２．学習の始まり　～ハノイの街を歩く～

学習の舞台は学校の周辺。日本の子どもたちと異なり、本校の児童は学校周辺の地域は登下校のバスから街並みを眺める程度でなじみがない。「学校の周りについて知っていることは？」とたずねると「車が多い」「フォーのお店がある」など、自分の見かけたことを言うので精一杯である。

２年生になって２か月たった６月、まずは街を歩いて色々な気づきや疑問を見つけさせ、ベトナムの街に興味を持たせたいと考えた。そこで２年生３学級総勢60人で、学校周辺の街歩きへ出た。そこで街の様子や人々を観察することで、子どもたちはたくさんの気づきをした。「路上のバインミー屋（ベトナムのサンドイッチ）食べたことがないけれど、とてもおいしそう、食べてみたいな」「物を売っている人でも、店の人、屋台の人、行商の人、色々いるな」「日本と比べてやっぱり道にごみが多いな。どうしてかな」など、子どもたちは今まで気に留めることがなかった色々なことに気づいたり、疑問をもったりした。

それをきっかけに、学校の登下校でバスから眺める景色や週末に家族と外出した時などに色々なものを見つけ、教師に報告してくるようになった。まち探検を通して、ハノイの町や人々の様子により関心を持ったと感じた。

３．夏休みで高まった子どもたちの先入観

１学期、まち探検を通して、今まで知っているようで知らなかったハノイの街の様子を知ったり、気に留めなかったベトナムやハノイのことが少しずつアンテナに引っかかってきたりするようなった子どもたち。しかし、夏休みの日本への一時帰国により、子どもたちのベトナムに対する思いや気づきは一旦リセットされていた。「日本の街はすごくきれいだった」「日本は便利だった」年に数回しか帰らない日本を満喫し、ベトナムのことよ

りも日本の素晴らしさを実感していた子どもたちである。日本人でありながら、彼らにとって日本はある意味で「憧れの国」といえる。

２年生の子どもたち、いやハノイ日本人学校の子どもたちは、こういった経験を繰り返す中で、「日本は素晴らしい国」「ベトナムは発展途上の未熟な国」という先入観を持っているのではなかろうか。だからこそ、夏休み明けの２学期は、子どもたちのそのような先入観を払しょくする絶好の機会と考え、さらに「まちたんけん」の学習を続けた。

４．ベトナムの人々の思いを知る

１学期の学習で、ハノイの街を歩いて観察し、たくさんの不思議なものや面白いものに出会った子どもたち。ハノイの街や人々に関心を持ったが、「ハノイが好き」という地域への愛着へは至らなかった。

地域への愛着を持たせるためには、その地域の人々との関わりが重要であると考えた。地域の人々と関わり、その人を好きになることを通じて、「そういう人たちが頑張っているハノイの街はすてき」「そこに暮らす自分、そこで学校に通う自分っていいな」と子どもたちに思わせたい。

海外暮らしという貴重な経験をしていながら、日本で普通に学校に通う大多数の子どもたちのことを常にうらやましく思っているようでは、もったいない。ベトナムの文化や人のよさを子どもたちに感じさせたい。そんな思いで「もっとなかよし、まちたんけん」の学習をスタートさせた。

(1) まちの人となかよくなろう

学習のテーマは「まちの人となかよくなろう」である。子どもたちに、「街の人と仲良くなろう。どうやったら仲良くなれるかな？」と尋ねると、「お話すればいい」という意見が出てきた。「働く人にどんなことを聞きたい？」と尋ねると「どうしてその仕事を始めたのか」や「たのしいときやたいへんなとき」「この地域にどうなってほしいか」「日本のことをどう思うか」などの質問が出てきた。

「でも先生、ベトナム語で聞くの？それはぼくたちにはできない」言葉の壁はこういったところにも立ちふさがる。しかし、子どもたちなりの解決方法をいろいろ考えた。「ベトナム語の先生のハン先生に通訳してもらおうよ」「〇〇さんのお母さんはベトナム語が話せるから通訳してもらおうよ」という結果、ベトナム語講師のハン先生と保護者ボランティアに通訳をお願いするという形でまち探検に出かけることが決まった。

(2) ベトナム語講師ハン先生にインタビュー

子どもたちからハン先生に通訳をお願いするという目的も合わせ、最初にハノイ日本人学校に10年務めるベトナム語講師のハン先生にインタビューを行った。以下、質問と答えである。

Q.どうして日本人学校ではたらこうと思ったのか。

A.ずっと勉強してきた日本語を生かしたい。

日本の子どもたちにベトナム語を教えたかったから。

Q.どんな思いで仕事をしているのですか。

A.仕事に誇りをもってやっている。

Q.うれしい時や大変な時はどんなときですか。

A.うれしい時は、みんなが楽しくベトナム語を勉強してくれた時。大変な時はベトナム語が好きでない人を好きにさせること。

Q.日本のことをどう思いますか。

A.日本人はきれい好きなところが好き。　ルールをしっかり守るところが好き。

Q.この地域にどうなってほしいですか。

A.発展してにぎやかになるのもいいけれど、静かで自然の多い地域を残してほしい。

児童の振り返りより

・ハン先生は日本語を生かしたくて日本人学校につとめたんだなあ。すごくべんきょうしたんだなあ。
・ハン先生はぼくたちのために、いろいろくふうしてベトナム語のじゅぎょうをしてくれていることがわかった。ぼくもベトナム語のべんきょうをがんばりたい。
・ハン先生が日本や日本人がっこうのことをすきと言ってくれてうれしかった。

普段は授業でベトナム語を教えてもらっているハン先生。今回のインタビューでは、ベトナムや日本、日本人学校やその地域に対する思いを聞くことで、子どもたちはハン先生のことをより身近に感じ、ハン先生が好き、もっと仲良くなりたいという気持ちが高まった。やはり「話をする」というのはとても大事だと確認できた。今回のインタビューを踏まえ、地域で働く様々な人たちにインタビューをすることにした。

(3) まちではたらく人へインタビュー

探検では地域にある幼稚園、レストラン、カフェ、服屋の 4 か所にインタビューに行くことになった。3 クラス 60 人を 4 つのグループに分け、それぞれに教員 1 人と通訳 1 人がつき、子どもたちのインタビューをサポートした。

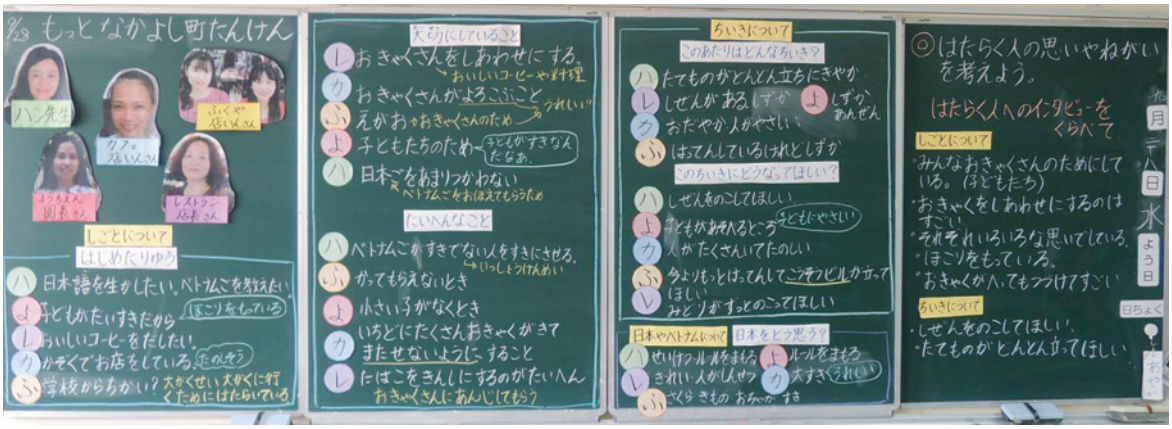
子どもたちの質問は日本と同じように事前に施設に届け、快く了承してもらった。子どもたちは各店や施設でたくさんの質問をし、働く人達と関わることができた。インタビューをもとに、働く人が仕事や地域に対してどのような思いや願いを持っているのかを考えさせた。

(4) 探検での気づきを話し合う

まち探検では、子どもたちはそれぞれ 4 か所に分かれてインタビューを行った。だから、他のグループがどんなことを聞いてきたのかは知らない。探検が終わった後、児童がそれぞれインタビューで聞いたことやインタビューを通して気づいたことや感じたことを出し合うことで、地域で働く人や学校周辺の地域について見方を広げたり、考えを深めたりしたいと考え授業を行った。

探検での気づきをクラスで話し合う

授業では、それぞれの児童が「自分がインタビューしたこと」そして「それについて思ったこと」を出し合った。みんな他の友達がインタビューで聞いてきたことにも興味をもって耳を傾けていた。地域の人達と関わるという一連の学習を通して、児童のベトナムやハノイの街、学校周辺の地域についての見方や考え方が広がったと感じた。



授業の板書

学習後の児童のまとめより

・このちいきは、たてものがたって、しぜんがあっておだやかなちいきなんだなと思いました。この人たちのしごともちいきのやくに立っているのだなと思いました。
・まちたんけんをして、ベトナム人がとてもやさしくてしんせつということにはじめて気づきました。
・一学期のまちたんけんでは、あまりベトナム人の気もちが分からなかったから二学期お店の人にインタビューをして今いろんな人の気もちが分かりました。みんなおきゃくさんのためや、子どもたちのためにはたらいているからやさしい人たちだと思いました。
・ベトナム人ってのんびりすごしているのと思ったけど、ピシピシピシピシって仕事をしているんだと思いました。
・このちいきはにぎやかでいいところです。ぼくたちも日本が好きと言われたらうれしいのと同じで、ベトナムの人たちもうれしいと思います。
・ベトナムはゴミがおちていて、きたないところもあるけれど、しんせつな人がいっぱいいるなあと思いました。

5．まとめ

この「まちたんけん」の実践を通して、子どもたちのベトナムへの「マイナスな先入観」を少し変えることが出来たのではないかと考えている。もちろん、あえてプラスな部分だけを取り上げ、無理やりそれを子どもたちの中に刷り込むことに意味があるとは思わない。ただ、勝手な先入観ではなく、プラスな部分もマイナスな部分も直接自分の目で見てみきわめ、批判的に物事を見ていく力を、子どもたちにつけていかなくてはならないと考えている。だからこそ、低学年段階で、現地の人と直接かかわって「良さに気づく」ことはとても大切なことではないだろうか。

この学習では、ベトナムに住みながら直接ベトナム人と関わることが少なかった子どもたちが、ベトナムの人達と関わり、色々なことを感じることが出来たという点で、一定成果があったと考えている。現在、日本とベトナムの関係は深く、ベトナムから多くの留学生や技能実習生が日本に来て学んだり、働いたりしている。ベトナムに住み、丸ごとベトナムを感じて成長していく日本人学校の子どもたち。そんな彼らが、日本に帰ってからも、ベトナムの人達を肯定的に受け止め、両国の架け橋になってくれることを願っている。